

団栗のごりごり廻る洗濯機

後閑達雄（『母の手』）

後閑さんが第二句集を上木された。第一句集『卵』（2009年刊／ふらんす堂）では、

冷蔵庫まづは卵を並べけり

があったが、掲句は洗濯機。誰にでも心当たりのある一瞬が軽妙に掬いとられている。こういう句を見つけることが『母の手』を読む愉しさでもあるだろう。タイトルになった句、

吾よりも母の手あたたかきいつも

ほか、母の秀句はたくさん収められている。長年の介護生活を経て、アルツハイマーが進行された御母堂を施設に託された。無念だったり不憫だったりの思いを乗り越えてお見舞いをなさる日々だろう。

母に腕噛まれてしまふカーネーション

白玉にほのとふくらむ母の頬

よく拭きし眼鏡を母に菊日和

カーネーションの句は胸を突かれる。リアルで哀しい。白玉の句はえもいわれぬ優しさ。「菊日和」の句もいい。眼鏡をよく拭いて、秋晴れの気持ちよさを母に贈られたのだ。

猫の子の片目遅れて開きけり

この句を読むと即座に思い出したのが、『卵』の〈鳥籠の日向を残し蒲団干す〉だった。シチュエーションは全く違うのだが、小さきものへのまなざしと同じ作者のものであると納得する。

目の前の大きなお尻潮汐狩

白鳥の喧嘩つひには脚も出る

こういう俳諧味抜群の句も散見され、作者の句作の幅の広さを頼もしいと思った。椋連衆のみならず、広く読まれてほしい一書だ。